

# 佐伯独歩会会報

発行責任者  
宮明邦夫

## 短編小説の名手・国木田独歩

中島礼子

学習研究社刊行の『国木田独歩全集』は全十巻、別巻の構成である。そのなかで小説は第二、第三巻が当てられている。これらに収録された小説はすべて短編である。独歩は晩年の明治四十年八月八日から新聞「日本」に「暴風」を連載しようとしたが、肺結核の病状が進んでいたということもあり、同月二十六日の十四回で中絶し、最初の長編小説の試みは未完に終わっている。

独歩が短編小説の名手であることはつとに名高い。平野謙は、学習研究社から『国木田独歩全集』が発刊される際の推薦の辞として次のような文章（「国木田独歩全集を推す」）を寄せている。長いが次に引用してみたい。

全集発刊の「推薦の辞」であるから、幾分か割り引いて読むにしても



か、幾分か割り引いて読むにしても

志賀直哉、葛西善蔵、芥川龍之介、太宰治らはすべて短編小説の名手である。彼らの珠玉の短篇こそ、わが近代文学史上の脊髄をなす純文学の精華にほかならない。そして、国木田独歩はそういう志賀直哉らのもっとも手近な先達である。いわば国木田独歩とともにわが短篇小説の骨法はさだまり、したがって、今日の純文学は国木田独歩ともにはじまる、といつても過言でない。

独歩の短篇の新鮮、明晰、清澄はほとんど天賦のものであって、水到りておのずと渠を成すような彼の作品は、そのまま詩と散文の稀有な結晶といえよう。

手放しの賛辞である。葛西善蔵を除く三人の作家は有名であり、なお今日多くの愛読者を獲得している。国木田独歩研究者でいまや最長老の山田博光氏は、全集第二巻の「月報」において、芥川龍之介を「国木

国木田独歩は佐伯市では「春の鳥」「源叔父」「鹿狩り」「豊後の国佐伯」などが知られているが、独歩の名を高名にしているのは短編集であり、数多くの作品がある。中島先生に独歩の短編の妙を解説していただいた。違った視点から独歩を眺めることも新たな独歩像を広げていくことができるのではないかと考えて、お願いしました。

田独歩の理解者」と規定しつつ、独歩・芥川の共通点として「その時代の短篇作家の第一人者」「短編小説の構成において知的な処理を見せている」ことなどをあげた。山田氏は「だが、私にはこのような共通点などはどうでもよい。「驟死する人足の気持を知つてゐる」作家として独歩をつかまえた芥川の慧眼にただただ服するものである。」と、芥川が独歩の「窮死」を評価していることを指摘している。

また、巖谷大四是全集第六巻の「月報」において、河出書房の「文藝」の企画「作家推奨名作選」で「著名な作家に、その作家の好きな短篇作品を選んでもらって、推奨の言葉と一緒に載せたことがある」として、志賀直哉が国木田独歩の「窮死」を「すぐれた短編」として選んだことを紹介している。独歩の短篇小説の中で期せずして短篇の名手として名高い芥川と志賀が晩年の小説「窮死」を高く評価していることに感嘆せざるをえない。

それではなぜ独歩は後年の短篇の名手からも評価される短編小説を創作していったのか。そしてまた短編しか残さなかったのか。その秘密にうである。

2・48「山頂まであと400m」 3・01元越山山頂に立つ一等三角点 強風でゆっくり出

「山嶺達したるときは四囲の光景余りに美に、余りに大に、余りに全きがため感激して涙下らんとしぬ。ただ名状し難き鼓動の心底に激せるをみるなり、太平洋は、東にひらき、北は四国の地、手にとるがごとく近くに現われ、西及び南はただ見る山の背に山起り、山の頂に山立ち波のごとく、潮のごとくその壯観無類なり。最後の煙山ついに天外の雲に入るがごときにいたりては……」 「欺かざるの記」より

3・05下山開始 山道をどこまで下つても、右側の谷を見れば、はるか谷底まで杉、ヒノキの幹が直立している感じで、山の威容に驚く。

なお、独歩が佐伯に滞在した頃は、山口県の柳井、田布施から佐伯に行くには、10月27日夜10時に柳井港に出て、半夜乗船。28日朝 宇品港着。その日は終日止まりて、三津ヶ浜行の汽船を待つ。午後7時乗船、夜半 三津ヶ浜着。

## 国木田独歩が愛した豊後の国 佐伯元越山に登る

山口県田布施町

藤山照夫

「山林に自由存す」と詠う独歩は自然、特に山が好きであった。独歩が「我が故郷」と呼ぶ山口県の田布施町にいた頃は、仮寓の裏にある小山や近くの高塔山（独歩は高叫山と呼ぶ）などに弟の収二や近所の子供らとよく登って詩の朗読をしたり、読書をしたり、時には収二を聴衆者として演説の練習をしていた。

佐伯では下宿の裏にある城山に弟と登って、詩を詠吟したり、読書をしていた。その下宿の窓から沖を見ると、川を隔てた山の向こうに元越山（581.5m）が望める。毎日眺めているうちにあの山に登って見たいという願望が高まった。

ある朝、番匠川の船頭に呼び止められて渡し船に乗り、川を下り、茶屋ヶ鼻を過ぎると1時間あまりで木立地区に到着した。わらじ、脚絆などの身支度をしていよいよ憧れていた元越山への山旅が始まる。その時の辺りの様子を「元越山はるかに黄金の海を限り、疎林・孤村その間に点在し」と独歩は「元越山に登る記」に記している。独歩が辿った道を是非

自分も歩いてみたいと思い、20年12月16日に実行する。朝、独歩が良く登った城山に登り、下山してすぐ麓の独歩館（独歩が下宿していた旧坂本家）を訪

問。独歩が生活したままの間取りや展示品を見せてもらう。裏庭では「独歩がこの階段を登って城山へ通った」との説明を受ける。ここで写真を撮影していた時にスマホが動かなくなつた。最悪だ。前の「城下町観光交流館」で貸し自転車を借りて佐伯駅まで帰る。昼食後、佐伯駅からバスに乗り、木立地区の岡バス停に立つ。「これから17km」と表示してある

12・30田圃の中の道を迷いながら歩いて12・56に登山口に到着。そこには「山頂まで3.2km」の案内板がある。（写真が撮れないので、登山メモのみ記す）

歩き始めて尾根を登っていると、1・13に3人の若い男性が下るのに出会う。独歩が登った時は、このような登山路はなかっただろうし、正しいコースを知らず、我武者羅に、悪戦苦闘して登ったよ

ついて探ってみよう。

独歩は明治二十四年一月四日、一番町教会において牧師植村正久により受洗した。独歩は文学に造詣が深い植村正久に導かれ、ワーズワスに傾倒していった。独歩は明治二十六年九月三十日に佐伯の鶴谷学館の教師になるために赴き、二十七年八月一日、佐伯を離れる。わずか一年弱の佐伯生活であるが、独歩が「真にワーズワスを読んだのは佐伯に居る時で、」尤も深く自然に動かされたのは佐伯に於てワーズワスを読んだ時であつた。（「小春」）

やない独歩クラブはエッセイコンテストを実施します。選考者は中島礼子先生です。お問い合わせは09079931653まで

29日午後乗船、30日正午 佐伯着。このように3日間を要した。この度の旅で、独歩が「豊後の国 佐伯」に滞在したのは1年にも満たないのに、何故このように佐伯に魅せられ、愛着を持ったのかがよく分かった。それは主に次に掲げるような理由が考えられる

- (1) 美しい自然。背後に大好きな山々、前は太平洋に接する湾と川。（交通の便）
- (2) 独歩は英国のロマン派詩人ワーズワスの熱烈な愛好者であり、佐伯時代に最も集中してその作品を読んでいる。その作品に出てくる自然と佐伯の自然に共通する点が多かった。（相通じる自然観）
- (3) 温暖な気候・地形と豊富な農・水産物…… 美味しいミカンや魚料理
- (4) 白壁の続く城下町と暖かい心の住民…… 令和の時代になっても尚これほど独歩の業績を讃えようとしている土地が他にありませんか？

### 国木田独歩

生涯150年を祝う記念行事



2021年7月15日(木) 9:00~12:00

麻里府体育館（旧麻里府小学校体育館）

講演 独歩の人間性を語る 9:15~10:45  
柳井孝典 社会教育委員 松島幸夫 先生  
講演 独歩の文学的探求 10:50~11:30  
「田舎の詩人」田布施の柳井孝典  
特別講演 独歩の文学的探求 11:35~12:00  
柳井孝典 先生

<主催> 国木田独歩生涯150年記念事業実行委員会

<お問い合わせ> 田布施町観光協会 電話 0820-52-3527

\*注意: 新型コロナウイルスの為、県内だけの募集

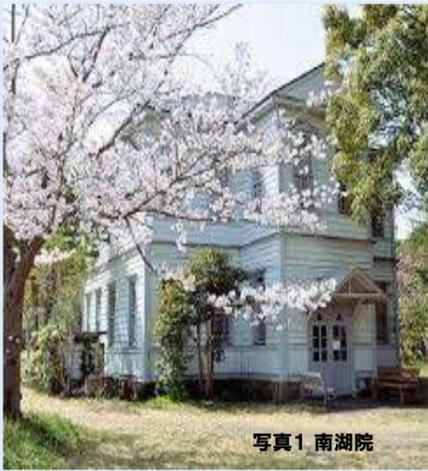


写真1 南湖院

独歩は1908(明治41)年2月茅ヶ崎にあるサナトリウム南湖院(写真1)に入院し、141日の闘病の末、6月23日に最期を遂げました。仮通夜は独歩の妻が借りていた南湖院近くの家で行われ、関係者の何人かは1899(明治29)年以来現在も営業を続ける茅ヶ崎館(写真2)に宿泊し、乱痴気騒ぎが生まれました。翌24日茅ヶ崎で



写真2 茅ヶ崎館

茶毘に附され、29日に青山斎場にて葬儀が執り行われました。入院中は田山花袋・小栗風葉らにより『二十八人集』が刊行され、印税は入院費に充てられ、病床の独歩に贈呈されました。また独歩は見る事が出来ませんでした。真山青果が闘病中の独歩の口述筆記をまとめた『病床録』も刊行されています。

その後、彼の業績を顕彰するため1960(昭和35)年茅ヶ崎文化人クラブにより海岸のそばに位置する茅ヶ崎市営球場の南側に「独歩追憶碑」(独歩碑 写真3)が建立されています。

▲茅ヶ崎独歩会設立の経緯▼  
独歩没後100年に当たる2008(平成20)年、「国木田独歩没後100年茅ヶ崎実行委員会」を4名(後の



写真3 独歩追憶碑

茅ヶ崎独歩会会員3名を含む)で設立。同年6月22日(日)茅ヶ崎館に於いて、茅ヶ崎市文化推進課・開高健記念会・早稲田大学稲門会・角川学芸出版後援のもと「国木田独歩没後100年—明治の文人たちと茅ヶ崎館—」をテーマにした講演会と朗読会を実施。『編集者 国木田独歩の時代』(角川学芸出版)の著者黒岩比佐子氏に講演を、ナレーター志麻かの子氏に独歩作品の朗読を行っていただきました。

2018(平成30)年、茅ヶ崎市の「茅ヶ崎ゆかりの人物館」での企画展示「没後110年 国木田独歩 茅ヶ崎ですごした141日」展に協力するため「国木田独歩没後110年実行委員会」を12名で再結成。市の展示で「国木田独歩ゆかりの碑」の箇所のデータ提供に協力。その際、佐伯独歩会様、やない独歩クラブ様よりも独歩の碑の貴重な写真データを提供して頂きました。会独自の事業としては、独歩ゆかりの場所のまち歩き、独歩碑での献花式、茅ヶ崎館での講演並びに懇親会を実施。「ちがさき丸ごとふるさと発見博物館の会」にガイド協力して頂き、田山花袋『東京の三十年』中の

「独歩の死」を基に市民向けにまち歩きを実施。独歩の命日6月23日には、市長、中島礼子先生を来賓としてお迎えし独歩碑に於いて献花式を行い、場所を茅ヶ崎館に移し、60名程が出席し、中島礼子先生に「独歩の魅力について」、弊会会員で東海大学非常勤講師の水沢不二夫先生より「独歩と茅ヶ崎館及び南湖院について」の講演を実施致しました。

▲現在の活動と独歩生誕150年の事業 計画▼写真3 独歩追憶碑

独歩没後110年事業終了後、2019(平成31年)、「湘南茅ヶ崎国木田独歩会(略称 茅ヶ崎独歩会)」を結成。現在の会員は13名。コロナにより、昨年からはZOOMを使用した事業展開を模索中です。2020(令和2)年11月、第1回読書会を中島礼子先生に解説をお願いし、神奈川県を舞台とする独歩作品の読書会をZOOMにより実施しました。今年2月には逗子を舞台とする『たき火』の読書会に佐伯独歩会事務局長、やない独歩クラブの方もご参加いただきました。

6月19日にはコロナを考慮し茅ヶ崎独歩会を中心に少人数で献花式を独歩碑の前で行う予定です。今年は独歩生誕150年にあたり、11月初旬に『たき火』の舞台となった逗子の海岸近くの会場でプロのアナウンサーによる朗読会を計画中です。

また、独歩の命日6月23日に弊会ホームページを公開予定(「独歩と茅ヶ崎」またはURL: doppochigasaki.com 検索)ですので、ご覧いただければ幸いです。

## 進む 他地域との交流

独歩忌110周年を契機として、各地の独歩サークル等と交流が始まりました。各会の活動の様子をお知らせします。まずは、独歩が療養していた南湖院がある茅ヶ崎独歩会から、そして、山口県の独歩会です。

### 湘南茅ヶ崎国木田独歩会(略称 茅ヶ崎独歩会)について

湘南茅ヶ崎国木田独歩会代表 楠 正昭

#### ▲独歩と茅ヶ崎の関わりについて▼

独歩は『欺かざるの記』時代、「詩人」すなわち小説家を志し、「詩術」すなわち「小説構造、文学と詩想」を学ぶために外国文学の読書をした。なかでも、森鷗外の翻訳によるものが多くみられ、「埋れ木」・「悪因縁」・「瑞西館」・「はげあたまたま」・「ふた夜」などを記している。この当時の鷗外の短編小説の翻訳について、小堀桂一郎氏につきのよう指摘がある。

ホフマン、クライスト、シュテレン、ドオデン等の作品の翻訳は(中略)西洋近代の短編小説なる様式のより直接なる紹介の業に他ならない。(中略)それらは、謂はば短篇小説制作の模範として当時の文壇に提示された、彼の啓蒙的文学活動の一端ともいふべきものであった。(『鷗外選集』第一六卷「解説」)

独歩は森鷗外が意図したように、鷗外の翻訳物によって短篇小説制作を学んだのである。 また、独歩自身、文章を冗長に続けるのを好まなかった。これも短篇小説になかった技法と言えるのではないだろうか。それを端的に物語っているのが独歩が晩年茅ヶ崎の南湖院の病床で真山青果に語った言葉である。独歩は「少年の悲哀」を書くに当たり、次のように述べている。

『少年の悲哀』中の叙景は、余の目に熟したる柳井津の町をかけるものなり。書けばまだ書けるし、書き足らぬやうな気もすれど、一面より考ふれば書き足らぬ位が丁度好かりしかも知れず。十二分の感興を蔵して、其五六分を描けるものに非ざれば、印象が強く来らぬものなり。十分に書けば、どうしても平面的になりて真の味の出ぬ恐れあり。書き足らぬより書き過ぐる弊は必ず多し。(『病床録』)

『病床録』の他の箇所では、文章について「文章の要訣は何ぞ。言葉短くせよ、言葉簡略にせよ、言葉を平易にせよ、これだけでも盡せば盡きるなり。」と述べている。これなども独歩の短篇小説が多くな

人々に賞賛される理由であろう。独歩が短篇小説創作を好んだという事は、なによりも独歩自身の性向に向いていたということであったのかもしれない『病床録』のなかで、独歩は「号外」について「殆ど一気筆を呵して成れり。自分の雑誌に自分の作品を出さざるは不親切なりとの編輯者の詰責に已むなく一晩にて書きなぐれり。」と述べている。同じく「一気に成れるもの」として「牛肉と馬鈴薯」を挙げてい

る。「こも亦殆ど一晩と一日位にて書けり。神来と云ふべきものか、頭の中に感情がグルグル渦の如く溢れて、筆もつ手の遅きを恨む程なりき。」と述べている。このような一気呵成に書き上げることについて、当時、東京新聞社勤務であった樋田満文は「それは元来新聞記者に要求される筆の速さであり、時間的制約はまた、必然的に短篇という形式をとる傾向をもたらしたようにも思われる。中絶した『暴風』を除いて独歩の作品がすべて短篇ということも、ジャーナリスト生活が永かつたことと無関係だったとはいえないのではなかるうか。」と自己の体験を踏まえてその理由を述べている。

(『全集』第七巻月報)

## 国木田独歩生誕150年記念

### 150年記念

上記のような様々な要因から独歩は短篇小説を創作していった。その短篇小説こそ独歩の真骨頂を發揮できるものであったということができよう。

また、やない独歩クラブはフォト・トコンテストを実施します。担当者より田布施町・平生・柳井の現地風景とはかぎらない。独歩の心象風景などでもよいとの連絡をもらっている。締め切りは7月31日。応募サイズはA4。応募先は74210021山口県柳井市柳井371411柳井市観光協会お問い合わせは09079931653まで

